

文学部・人文社会系研究科

I	研究の水準	研究 4-2
II	質の向上度	研究 4-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 先端的・文理融合的研究の活性化のため、学内外の横断的な共同研究を推進しており、研究科教員が研究代表者として内外の研究者と連携し、「インド農村の長期変動に関する研究」、「仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集（バウツダコーシャ）の構築」等の研究領域の拠点作りの基礎となる研究プロジェクトを実施している。
- 人文知を広く社会に普及・啓蒙するために、公開講座、講演会、シンポジウムを実施している。文学部公開講座は平成23年度から毎年度実施し、平成27年度の「古代ギリシャ教に改宗することはできるか？」と題した講演には約200名が参加しているほか、附属北海文化研究常呂実習施設が所在する北海道常呂町において、高校生や一般住民を対象に「常呂公開講座」を継続的に実施している。また、平成23年度に設置した死生学・応用倫理センターにおいて、医療・介護従事者のための死生学セミナーや臨床倫理セミナーを実施しており、いずれも参加者は100名を超えている。
- 教員による論文や著書等の公表業績数は、平成27年度において972件、教員一人当たり7.3件となっている。
- 科学研究費助成事業の採択状況は、平成21年度の174件（約4億2,600万円）から平成27年度の238件（約5億4,700万円）へ増加している。また、教員一人当たりの獲得資金は、平成21年度の約280万円から平成27年度の約470万円へ増加している。

以上の状況等及び文学部・人文社会系研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に美術史、日本文学、英米・英語圏文学、日本史、実験心理学の細目において卓越した研究成果がある。また、日本学術振興会賞、日本学士院賞、芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞等、国内外の賞を43件受賞している。
- 卓越した研究業績として、美術史の「室町時代における絵巻の制作と享受に関する研究」、日本文学の「近代小説の表現機構の研究」、英米・英語圏文学の「凝視に関する文学的研究」、「アメリカ・ハードボイルド小説の研究」、日本史の「中世の日本列島をめぐる対外関係に関する研究」、実験心理学の「人間の巧みな動作を支える脳のメカニズム」がある。そのうち「室町時代における絵巻の制作と享受に関する研究」は、美術史学、歴史学、文学の枠を超えた総合的な文化研究の優れた実例として、第7回日本学術振興会賞を受賞している。
- 社会、経済、文化面では、特に日本文学、英米・英語圏文学の細目において特徴的な研究成果がある。また、教員の刊行した一般書は200冊を超えている。
- 特徴的な研究業績として、日本文学の「近代小説の表現機構の研究」、英米・英語圏文学の「凝視に関する文学的研究」、「アメリカ・ハードボイルド小説の研究」がある。

以上の状況等及び文学部・人文社会系研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、文学部・人文社会系研究科の専任教員数は136名、提出された研究業績数は22件となっている。

学術面では、提出された研究業績20件（延べ40件）について判定した結果、「SS」は4割、「S」は4割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績7件（延べ14件）について判定した結果、「SS」は2割、「S」は6割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 学内外の横断的な共同研究を推進しており、研究科教員が研究代表者として内外の研究者と連携し、「インド農村の長期変動に関する研究」、「仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集（バウツダコーシャ）の構築」等の研究領域の拠点作りの基礎となる研究プロジェクトを実施している。
- 平成 25 年度に次世代人文学開発センターに人文情報学拠点を設置しており、アジアに伝承された仏教の知識体系である大蔵経のデジタルテキストコーパスを基盤に、文字資料によるデジタル知識基盤のモデルを提供している。
- 平成 23 年度に設置した死生学・応用倫理センターにおいて、医療・介護従事者のための死生学セミナーや臨床倫理セミナーを実施しており、いずれも参加者は 100 名を超えている。
- 教員による論文や著書等の公表業績数は、平成 21 年度の 560 件から平成 27 年度の 972 件へ増加しており、そのうち日本語以外の業績は、96 件から 158 件へ増加している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 学術面では、特に美術史、日本文学、英米・英語圏文学、日本史、実験心理学の細目において卓越した研究成果がある。また、日本学術振興会賞、日本学士院賞、芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞等、国内外の賞を 43 件受賞している。
- 社会、経済、文化面では、特に日本文学、英米・英語圏文学の細目において特徴的な研究成果がある。また、教員の刊行した一般書は 200 冊を超えている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。